

日本で働く韓国人ヴォーカルトレーナーの教育観の 多様化に関する質的研究

著者	李 奎台
雑誌名	国立国語研究所論集
号	10
ページ	107-133
発行年	2016-01
URL	http://doi.org/10.15084/00000811

日本で働く韓国人ヴォーカルトレーナーの 教育観の多様化に関する質的研究

李 奎台

東京外国語大学大学院 博士後期課程／
国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター 非常勤研究員 [-2015.03]

要旨

本研究は、ある韓国人ヴォーカルトレーナーが、日本の音楽アカデミーに就職し、日本でヴォーカルトレーナーとして働くことで教育観がどのように多様化してきたか、そのプロセスを追った研究である。この目的のため、日本で働き始めた時期から1年3か月間、縦断的にインタビューを行い、その内容を質的分析手法の一つである SCAT によって詳細に検討した。対象としたヴォーカルトレーナーは、入社後に直面した退校率という問題を解決するために1人で悩み、問題を設定し、解決しようとした。しかし状況はさらに悪化してしまう。そのような状況において他の講師及び生徒と話し合ったことが、他者の価値観を知り、自身の指導方針を振り返る機会となった。その結果、教育観が多様化し、自身の指導方針における問題点が見えてくるようになった。このように危機的状況で行われた話し合いにより生じた内省が、教育観の多様化していくプロセス及びその多様化に影響を及ぼした要因として考えられる。本研究により、入社後に直面した危機的状態や問題解決から価値観が多様化していくプロセスが見られた*。

キーワード：キャリア形成、外国人労働者、指導方針、SCAT、自己評価

1. はじめに

経済産業省が2007年に公表した『グローバル人材マネジメント研究会報告書』によると、少子高齢化の進展、グローバル企業との競争激化、途上国の市場化という状況から、日本には現在「高度外国人材」¹の受け入れが求められている。高度外国人材の中には、日本の学習機関（日本語学校・専門学校・大学・大学院）での学習を終えてから就職する、言語的問題をある程度克服した人も含まれている。2013年に「留学」から「就労」への変更を目的として行われた在留資格変更許可申請数²は12,793人（前年比1,095人増）、うち許可数は11,647人（678人増）であり、年々増え続けている。これからも留学生から社会人となり、日本で生活する人の増加が予

* 本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」（プロジェクトリーダー：追田久美子）のサブプロジェクト「社会における相互行為としての「評価」研究」（サブプロジェクトリーダー：宇佐美洋、2010～2014年度）の研究成果の一部である。また本研究は、第124回NINJALサロン（2015年3月17日、於国立国語研究所）での口頭発表の内容を加筆・修正したものである。発表時に有益なコメントを下された方々及び日頃お世話になっている宮城徹先生、宇佐美洋先生に御礼申し上げます。また、投稿の過程において査読者の先生より大変有益なご意見を賜りました。厚く御礼申し上げます。

¹ 「高度外国人材」とは、専門的、技術的分野の在留資格を有する外国人労働者（人文知識・国際業務、技術、教育等の在留資格で働く外国人）を指す。例えば、システムエンジニア、通訳、英語学校などの語学教師に従事する外国人が挙げられる。

² 法務省入国管理局（2014）「平成25年における留学生の日本企業等への就職状況について」http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri07_00101.html（2015年7月31日参照）

測できる。このような状況の中で、日本での留学生活を経てから働く高度外国人材に焦点を当てる研究が近年行われており、留学生の日本の企業への採用において企業、政府、大学のキャリア教育の改善点及び支援が議論されている。例えば企業側で高度外国人材を雇用する際の困難点として、高度外国人材は転職や帰国等ですぐにやめてしまう、職場内で日本人社員とのコミュニケーションがうまく取れないという点が挙げられ、言語や異文化理解、日本のビジネス習慣の理解を促進すること、ビザ問題のような行政上の法制度を簡素化することが必要であると主張された（福岡・趙 2013）。

日本における高度外国人材の場合、新しい組織の中で自身と異なる価値観をもっている他者と一緒に仕事をするために、とりあえず日本人のような態度を取り、日本人を真似して行動しながら適応していく者が多い。一方、他者の価値観と衝突し、それによって今までもっていた価値観を変えながら適応していく者もいるだろう。しかし価値観の変容が日本社会への適応にいかにか結びつのかに注目した研究は、管見の限り見当たらない。

もし高度外国人材が日本で働く最初の段階から、どのような困難を経験し適応していくか（あるいは適応できないか）が明らかになれば、彼らの抱える心理的問題の解決や、福岡・趙（2013）により言及された、企業側が高度外国人材を雇用する際の困難点の軽減に、役立てることができる。そこで本研究では、日本の学習機関を修了してから就職する高度外国人材に焦点を当てて、就職直後からどのようなことを経験し、仕事に関する価値観が変わっていくかを明らかにする。

2. 先行研究

2.1 教師の価値観（教育観）に関する研究

教育は教師と生徒の間の相互作用を通じて行われることであり、教師の成長は生徒の教育に大きく影響を与えると思われる。特に教師の教育観は新任期から経験を積むことで変わると考えられ、どのような経験をし、どのような気づきが生じ、いかに教育観が変容したかに関する研究が行われてきた（新館・松崎 2009, 2010, 八田他 2012）。新館・松崎（2009, 2010）は、日本の小・中学校に所属する5人の教師を対象とし、PAC分析を用いて新任期の振り返り（新館・松崎 2009）と、教師自身が成長したと感じる学級づくりにはどのような要因があるのか（新館・松崎 2010）を分析したものである。さらに後者の研究では縦断的な観点から5人の教師の変化を分析しており、5人が働くうちに身に付けた〈生徒の多面的・肯定的理解〉〈自己開示とリレーションづくり〉〈同僚のサポート〉という新たな価値観を明らかにしている。

教師自身の価値観の変容について新館・松崎（2010: 45）は、「教師－生徒間システムの変革を支えたと考えられる教師自身のピラミッドシステムの変容が存在している」と述べた。興味深いのは、教師自身のピラミッドシステムの変容を支援したものとして、自己のモデルとする先輩教師との出会いが挙げられたことである。その教師からのサポートを受けつつ、その教師がもつ子ども観や教育観を自身の教育実践に取り込むことが、自らのピラミッドシステムの変容に繋がったと新館・松崎（2010）は解釈した。

新任期の自身と異なる教育観をもつ同僚教師や先輩教師との出会いが、自らのピラミッドシステ

ムの変容に影響を与えるには、まず他の教師との交流が必要である。新館・松崎（2009, 2010）が対象とした教師は小学校と中学校に所属していたため、このような交流があり、ビリーフシステムに変容が見られた可能性がある。

外国人教師の教育観の変容に関する研究としては、八田他（2012）が挙げられる。八田他（2012）は、タイの大学で教えている2名のタイ人の新人日本語教師に対して、日本での教師研修期間の前後に「いい日本語教師像」を探るPAC分析を行い、インタビューで表れた教師のビリーフ³に関する語りがどのように変化したか、その変化に日本での教師研修がどのように関わっているかを分析した。その結果、研修前後において、よりよく教えられるようになるために、学習者のやる気を引き出す授業や教え方を模索することに変わりはなかった。しかし研修後は、授業にもち込む話題や教材の模索だけではなく、学習者の理解度を上げる教え方もその一つの方法であることに気づいていた。これについて八田他（2012）は、「授業活動のわかりやすさやおもしろさをより広い視野でとらえるようになっていた」と解釈した。また研修前後において、学習者を助けるために、授業の目標・計画・授業後の反省と改善というサイクルによってよりよい授業をしようとしたことに変わりはなかった。しかし研修前の、授業で大切なことは「おもしろい授業」だという考え方が、研修後には「学習者が自分で気がつく考え方が大切」ということに気づき、授業評価の観点に変容が見られた。これは八田他（2012）によると、「おもしろい」というキーワードに対する対象者の意識がより深みを増していると言える。

上記の研究により、外国人教師が研修前から課題として抱えていたことが研修で刺激され、課題解決のための工夫が深まり、外国人教師の視野が広がっていることが明らかになった。また、教え方のおもしろさを大事にする姿勢は研修前後において相変わらずもっており、新たなビリーフとともにそれまでのビリーフも共存させていることが、明らかになった。日本での教師研修を経験することで、価値観がより多重化・多様化したと言える。八田他（2012）のタイ人の新人日本語教師は、母国で形成された価値観が、日本で行われた教師研修を通して変わった点で参考になるが、日本の大学で働き、日本人の同僚の教師の価値観に影響されたとは言いがたい。日本で教える中で変容する価値観についての研究が必要である。以下では、日本で学生時代を経て歌を教える職に就くまでの外国人の価値観について分析した李（2016）について紹介する。

2.2 日本で働く外国人の価値観の変容に関する研究

日本で学生時代を経て就職した外国人の価値観の変容に関する研究としては、李（2016）が挙げられる。李（2016）では、ある成人韓国人（スニ）に対して、来日後の1年3か月間の振り返りインタビュー調査を通して、彼女が日本でどのような経験をし、その経験がいかに価値観に影響を与えたかを明らかにした。価値観に影響を与えた経験をした時期は、内定をもらって歌を教えるアルバイトを始めた初日の授業で、韓国人講師に演歌を教わりたくないという生徒に担当変

³ 八田他（2012）におけるビリーフとは、「言語学習の方法・効果などについて人が自覚的にまたは無自覚にもっている信念や確信（日本語教育学会 2005: 807）」を意味する。

更を要請されてスニが落ち込んでいた時期である。これからも日本でヴォーカルトレーナーとして働くことができるかという不安を抱えていた時期に、上司に励まされ、その当時抱えていた不安が軽減され、これから日本でヴォーカルトレーナーとして働くことに前向きになった。李 (2016) によって、働き始めたばかりの時期に経験したことが価値観に影響を及ぼしていること、評価のあり方が変わることが明らかになった。

また、価値観が影響されるまでのプロセスの観点から見ると、自身とは異なる価値観を重要視する生徒の価値観を知り、今まで自身の中で「埋もれていた価値観」に光が当てられ、上司の自身とは異なる価値観に接することで能力に関する自己評価⁴が変わっていた。しかし李 (2016) では、日本でヴォーカルトレーナーのアルバイトとして働いて3か月目に行ったインタビューを用いて分析したため、その後どのように社会人として職場で適応していくかについては、議論することができなかった。そこで本研究では、李 (2016) におけるインタビューから、1年3か月にわたって2回のインタビューを続けて実施し、スニがどのように日本の職場で適応していくかに焦点を当てて分析することとした。

本研究の目的は、李 (2016) の分析結果を基にして、ヴォーカルトレーナーとして日本で働くうちに、スニの仕事に関する価値観 (本稿では「歌を教えるとはどういうことか」という教育観を指すことが多い) がどのように変わっていくのか、そしてどのように職場に適応していくかを明らかにすることである。スニの社会人としての変容を縦断的に調査し、そのプロセスを克明に記述する。そのために質的分析手法の一つである SCAT によって詳細に検討し、日本で働く高度外国人材の適応のためのケーススタディとして提供し、学術的に貢献することを目指す。

3. 研究方法

上記目的に従い、李 (2016) の対象者であるスニ (仮名、韓国人女性、インタビュー当時 30 歳) に引き続き協力してもらった。以下、3.1 に調査対象者及びインタビュー調査について、3.2 に分析方法について順次述べる。

3.1 調査対象者 (スニ) 及びインタビュー調査

スニは、韓国の大学でクラシック音楽を専攻し、フリーランサーのヴォーカルトレーナーとして働いた経験をもっている。2011年9月に韓国から来日し、半年間日本語学校へ通い、2012年4月から歌の実力をさらに上げるために、音楽系専門学校へ進学した。2年課程の専門学校であったが、半年で退学を決心し、2012年11月に日本の「音楽アカデミー」⁵への就職を決め、社会人として日本に滞在することになった。

⁴『社会心理学用語辞典』(小川 2004: 105)によると、「自己は、自分が自分を客観的に認知する時の対象、すなわち客体としての自分を指す」、「自己評価とは、自己概念の内容である自己の行動や態度に対する評価である」と定義されている。

⁵ スニが就職したこのアカデミーは、趣味やカラオケの上達を目的とした人をはじめ、歌手デビューを目指す人のためのレッスンまで幅広いレッスン及びコースを有するヴォーカル専門塾である。

インタビュー調査は全3回行った。1回目のインタビューは、李(2016)におけるインタビューである(2013年1月実施)。この時期は内定が決まり、アルバイトとして働いていた時期である。2回目のインタビューは同じ年の10月に行った。この時期は4月から正社員となり、半年が経った時期である。3回目のインタビューは2014年4月に行った。この時期は正社員となってから1年が経過した時期である。インタビューでは働きながら大変なことやうれしいこと、教えながら思ったこと、職場での人間関係やエピソードを自由に話してもらった。インタビュー後、筆者と食事をしながらインタビューで不明確だったところの補足説明をしてもらい、分析に加えた。

全てのインタビューは、スニがなるべく自由に豊富な表現で語れるとともに、筆者のスニに対する理解を深めるために、スニと筆者の母語である韓国語で行った。その内容は全て録音し文字化⁶した。このように収集したインタビュー内容に基づいて、スニの教育観に関する語りを抽出し、スニの教育観がいかに変わっていくかについて SCAT (Steps for Coding and Theorization, 大谷 2011) を用いて分析した。以下 SCAT について紹介する。

3.2 分析方法 (SCAT)

質的分析手法の一つである SCAT とは、4段階のコーディングをした後、全体の文脈を考慮し、インタビュー内容に対するストーリーラインを記入し、そこから理論を記述する分析手法である。SCAT における4段階のコーディングとは、マトリックスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、〈1〉データの中の注目すべき文、〈2〉それを言いかえるためのデータ外の語句、〈3〉それを説明するための語句(テキスト外の概念)、〈4〉(全体の文脈を考慮した)テーマ・構成概念を記入することである。〈4〉テーマ・構成概念とは、データに記述されている出来事に潜在する意味や意義である。質的研究のデータは、実験的研究状況において採取するのではなく、あくまで、その現象の起きている現場で採取し、その「社会・文化的文脈(socio-cultural context)」を重視して分析する。そして質的研究は、対象となる現象に内在あるいは潜在する意味を見出し、それを理論化することを目指す。そのため SCAT では、データから直接観察はできないが、データに内在していると考えられる意味を〈4〉テーマ・構成概念として記述していく。

このようにして記述した〈4〉テーマ・構成概念を紡いで、ストーリーラインを作成する。SCAT におけるストーリーラインとは、〈4〉テーマ・構成概念を紡いで研究者が再構成した物語である。ストーリーライン中の下線部が〈4〉テーマ・構成概念である。

ストーリーラインを記述したら、理論記述を行う。ストーリーラインは、上記のようにデータの構成概念を再構成しているため、ときに複合的で構造的となる。このように記述されたストーリーラインを簡略に断片化したものが、理論記述である。ただしここでいう理論とは、普遍的で

⁶ スニとのインタビューは韓国語で行ったため、まず韓国語で文字化してから日本語に訳した(以下、韓国語部分は省略)。発話文中の記号は以下のとおりである。

() …前後の文脈に基づいて筆者が追加した語句

[] …スニが日本語で話した部分

“ ” …他者や自分が話したことをスニが直接に引用した場合

” ” …スニが心の中で話したことあるいは考えたこと

一般的に通用する原理のようなものではなく、「このデータから言えること（大谷 2011: 159）」を意味する。しかし質的研究の結果においても一般性は欠かせない。これについて大谷(2008)は、「質的研究の結果も一般性を有するが、その一般性は、量的研究の一般性とは質が異なっている」と述べている。以下に具体的記述を引用する。

質的研究の一般化可能性は、論文の結論自体にはなく、それはむしろ、研究のオーディエンス（論文読者等）が論文を読み、それを自分の抱えているケースや、その他のケースと「比較」しながら「翻訳」することで、適用が可能となり、一般化が実現されるのである。つまり、質的研究の一般化可能性は、その「比較可能性 (comparability)」と「翻訳可能性 (translatability)」によって提供されるものと考えべきなのである。（大谷 2008: 349）

つまり「比較可能性」と「翻訳可能性」を担保するためには、「詳細な記述」が必要とされる。観察した事象やインタビュー内容だけではなく、その事象の文脈あるいは背景についても詳細に記述し、読み手に十分な情報を与えることで、読み手は比較・翻訳ができる。また、質的研究は主観あるいは主体的解釈を積極的に用いるために、場合によってはきわめて恣意的なものになってしまう危険性があるが、SCAT では過程が明示的に残るため、読み手が分析の妥当性を確認することができる。

本研究では、SCAT による分析手続きの過程を示し、読み手に分析の妥当性を確認することができるようにし、読み手に十分な情報を与え、他の状況に当てはまるかどうかの判断を読み手に委ねることができると判断したため、SCAT を分析手法として採用した。以下の表 1 に、本研究におけるインタビュー内容の SCAT による分析手続きの例を提示する。

表 1 インタビュー内容の SCAT による分析手続きの例⁷

発話文番号	話者	テキスト（筆者訳）	〈1〉テキスト中の注目すべき文	〈2〉〈1〉を言いかえるためのデータ外の語句	〈3〉〈2〉を説明するためのテキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念
16	スニ	その時は、日本での韓流ブーム、『KARA』が超人気だった時期だったから。	日本の韓流ブーム。『KARA』が超人気。	日本の韓流ブーム。	留学先を決める際の考慮点。	社会状況の考慮。

上記のように文字化資料の発話文一つ一つを、SCAT を用いてコーディングした。以下 4 節では、SCAT による分析の結果を提示していく。

4. 結果

それでは 3 回のインタビュー内容に対して、SCAT の 4 段階に沿ってコーディングしたものの中で、スニの教育観に関する部分を抽出し、分析した結果を時期ごと（音楽アカデミーでアルバイトしていた時期、入社半年後、入社 1 年後）に提示する。

⁷ テキスト内容は、韓国語で行ったインタビュー内容を筆者が直訳したものである。なお、4.1.1、4.2.1、4.3.1 の各表では、項目名の一部を簡略化し「〈2〉テキスト中の語句の言い換え」「〈3〉テキスト外の概念」と記す。

4.1 専門学校に通いながらアルバイトをしていた時期（2013年1月、1回目のインタビュー）

この時期は、スニが日本の音楽系会社（以下、音楽アカデミー）で歌を教えるアルバイトをしながら、日本の音楽系専門学校に在学していた時期である。2012年10月から日本でヴォーカルトレーナーのアルバイトを始める。この時期の筆者とのインタビューの総発話文は238文であり、その中でスニの総発話文は120文である（筆者の総発話文は118文）。スニの全ての発話文に対してSCATを用いて分析し、その中から自身の仕事について語った発話文を抽出した。

以下に抽出した発話文の一部について、SCATによる4段階の分析手続き、具体的な語りに対する分析、この時期のストーリーライン及び理論記述を提示する。（以下同じ）

4.1.1 この時期のSCATの4段階の分析手続き

以下に示す分析手続きは全てスニの発話である。発話文の中の<>の部分は筆者の発話である。

発話文番号	テキスト	<1> テキスト中の注目すべき文	<2> テキスト中の語句の言い換え	<3> テキスト外の概念	<4> テーマ・構成概念
1 ～ 57	中略 (来日動機, 日本語学校, 専門学校に通っていた時期の語り)				
58	一回, たった一か所の面接を受けたのですが, 受けました。	たった一か所の面接を受けたのですが, 受けました。	初面接で就職決定。		初面接で就職決定。
60	あれはほぼ奇跡でしょう。あれ正直に。ほとんどあの, 他の韓国人たちの話だと, あの, 何十か所, あの百か所も面接を受けるし, それでやっとやっと受かったと聞いたけど, なぜなら, 『もちろん』あの子たちは私と専攻が違うけど, <うん> 私は経歴もあるし, とにかくクラシックを専攻したから採用してくれたと思います。	あれはほぼ奇跡でしょう。あれ正直に。他の韓国人たちの話だと, あの, 何十か所, あの百か所も面接を受けるし, それでやっとやっと受かったと聞いたけど, 私は経歴もあるし, とにかくクラシックを専攻したから採用してくれた。	奇跡。他の韓国人たちに聞いた就職の大変さ。講師の経歴がある私, クラシックを専攻した私。	歌唱力に関する自信。	他の韓国人たちに聞いた就職の大変さ。講師の経歴がある私。 クラシックを専攻した私。 歌唱力に関する自信。
61 ～ 117	中略 (日本留学の準備, 専門学校での経験, レストランでのアルバイトに関する語り)				
118	お互い集中するでしょう, 理解するために。私は理解してもらおうと, この子たちは理解しよう, お互い集中して(私の指導が)わかって直して, それが(よく)なった, あの時私はとてもうれしい。	お互い集中する。お互い理解しよう。わかって直して。私はとてもうれしい。	お互いに集中。わかって訂正。喜び。		お互いに集中。私の指導を理解して訂正。講師としてのやりがい。

122	だから私の『生徒として』、あの子が『うまくなるように私は頑張る』、そしてあの子が『うまくなったら私も気分がいい』。	『生徒として』、『うまくなるように私は頑張る』、『うまくなったら私も気分がいい』。	生徒の歌唱力の上達は講師としての喜び。	講師のやりがいに繋がる生徒の歌唱力の上達。	講師としてのやりがいに繋がる生徒の歌唱力の上達。
123 ～ 127	中略 (韓国で働いた時の経験に関する語り)				
128	入試レッスンと、本当に私は企画社に所属されている子たちを教えました。<うん>だから本当に『厳しくしなかったらだめ』。	入試レッスンと、企画社に所属されている子たちを教えました。だから本当に『厳しくしなかったらだめ』。	入試レッスン。企画社所属歌手にレッスン。だから本当に『厳しくしなかったらだめ』。	韓国で厳しくレッスンする理由。	入試レッスン。企画社所属歌手に対するレッスン。『厳しくしなかったらだめ』な理由。
129 ～ 145	中略 (韓国の音楽大学の入試の競争の激しさ、企画社の所属歌手のデビューまでの厳しい指導に関する語り)				
146	怒ったり“あなたは今、それでいいと思う？そのままで大変な芸能界であなたが耐えられると思う？あなたがそのレベルで、あなたにさまだと思ってこうしているの”このように本当にこのように言わないとだめなんですよ。	怒ったり。大変な芸能界であなたが耐えられると思う？。このように言わないとだめなんですよ。	大変な芸能界。厳しく指導する韓国の指導環境。	大変な芸能界。生徒のためになる厳しい指導。	大変な芸能界。生徒のためになる厳しい指導。
148	日本では『優しい』(指導)なの、すごく。	日本では『優しい』(指導)なの。			日本では『優しい』指導。
150	すごく私は『優しい』、すごく『楽しく』するけど『厳しいって言われる』。	すごく私は『優しい』、すごく『楽しく』するけど『厳しいって言われる』。	私は『優しい』、『厳しいって言われる』。		私の『優しい』指導。『厳しいって言われる』私の指導。
152	『先生から』。	『先生から』。			私の指導に対する他の講師の評価。
154	『先生たちから』、なぜなら先生たちは、日本人たちは皆このように『もって回って優しく』それで‘あーあなたもとても上手なんだけど、これも少しするともっといいと思う’このように話すけど、私は“これはそのようにしてはいけない”とストレートで話すから。	『先生たちから』、『もって回って優しく』。‘あーあなたもとても上手なんだけど、これも少しするともっといいと思う’。私は“これはそのようにしてはいけない”とストレートで話すから。	他の講師たちの指導方式。遠回しな言い方をする他の講師の指導。ストレートに指摘する私。		他の講師たちの優しい指導に対する否定的評価。ストレートに指摘する私。遠回しな指導に対する否定的評価。
155	しかし、むしろそのほうがいいと言ってくれる生徒たちも多いです。	むしろそのほうがいいと言ってくれる生徒たちも多い。	私の指導に対する生徒たちの良い評価。		私の指導に対する生徒たちの良い評価。

156	なぜなら先生、他の先生たちは“上手ね、上手ね”このように話すからです。でも、なぜ上手にできたかは話してくれない、もしこれは少し足りないと話す時は、なぜ足りないかについては話してくれないそうです。	なぜ上手にできたかは話してくれない。なぜ足りないかについては話してくれないそうです。	良かった点、足りない点の理由を説明してくれない日本人講師たち。		<u>良かった点、足りない点の理由を説明してくれない日本人講師たち。</u>
158	ところで私は“この練習をする理由はこのようで、あなたがこの部分ができないからこのようにする”とこのようにはっきりと話してあげるからそのほうがいいそうです。	私ははっきりと話してあげるからそのほうがいいそうです。	私の指導方式に対する生徒たちの良い評価。	私の指導方針に対する自信。	<u>私の指導方式に対する生徒たちの良い評価。</u> <u>私の指導方針に対する自信。</u>
159 ～ 238	中略 (日本のアカデミーの体系的な管理システム、韓国と日本の生徒の学習ニーズ、勤務環境、担当変更の要請を受けたエピソードなどに関する語り)				

4.1.2 具体的な語りに対する分析

ここでは、音楽アカデミーの内定が決まりアルバイトしていた時期の、スニの仕事に関する価値観について、スニの語りを提示しながら論じる。

語り 1: ヴォーカルトレーナーとしての自信 (発話文番号 58, 60)

一回、たった一か所の面接を受けたのですが、受かりました。あれはほぼ奇跡でしょう。あれ正直に。ほとんどあの、他の韓国人たちの話だと、あの、何十か所、あの百か所も面接を受けるし、それでやっとやっと受かったと聞いたけど、なぜなら、『もちろん』あの子たちは私と専攻が違うけど、<うん>私は経歴もあるし、とにかくクラシックを専攻したから採用してくれたと思います。

語り 1 で語られたように、スニは初めて面接を受けた会社で内定をもらった。それをスニは「奇跡」だと表現した。他の韓国人生徒の話だと、日本で就職することはとても難しいが、自身は韓国で教えていた経歴があり、クラシック（声楽）を専攻したことがメリットであるため、採用に繋がったと考えている。このように自身のメリットについて語っていることから、歌を教えることへの自信や、クラシック（声楽）を専攻し歌唱力への自信があることが推測できる。

内定をもらった後、スニは内定先の音楽アカデミーでアルバイトとして働いていた。2年制の専門学校を半年で辞めてこれからヴォーカルトレーナーとして働くことについての不安は見られなかった。それも韓国で教えていた経験や歌唱力をもっていることから来る自信ゆえだと考えられる。

語り 2：韓国での私の厳しい指導（発話文番号 128, 146）

入試レッスンと、本当に私は企画社に所属されている子たちを教えました。<うん>だから本当に『厳しくしなかったらだめ』…（中略）…怒ったり“あなたは今、それでいいと思う？そのままで大変な芸能界であなたが耐えられると思う？あなたがそのレベルで、あなたなにさまだと思ってこうしているの”このように本当にこのように言わないとだめなんですよ。

語り 2 で述べられているように、スニが働いていた韓国の音楽業界では、大変な芸能界で生徒が生き残るために厳しく指導するようである。

語り 3：講師としてのやりがい（発話文番号 118, 122）

お互い集中するでしょう、理解するために。私は理解してもらおうと、この子たちは理解しようと、お互い集中して（私の指導が）わかって直して、それが（よく）なった、あの時私はとてもうれしい。…（中略）…だから私の『生徒として』、あの子が『うまくなるように私は頑張る』、そしてあの子が『うまくなったら私も気分がいい』。

語り 3 によると、スニが生徒の歌唱力が上達するように講師として頑張ること、そしてスニが指摘したとおりに生徒が歌い、歌唱力が上達した時に講師としてやりがいを感じる事がわかる。

語り 4：私の指導に対する自己評価と他の講師の評価（発話文番号 148, 150, 152, 154）

日本では『優しい』（指導）なの、すごく。すごく私は『優しい』、すごく『楽しく』するけど『厳しいって言われる』。『先生から』『先生たちから』、なぜなら先生たちは、日本人たちは皆このように『もって回って優しく』それで‘あーあなたもとても上手なんだけど、これも少しすともっといいと思う’このように話すけど、私は“これはそのようにしてはいけない”とストレートで話すから。

語り 4 で語られたように、スニの指導に対する自己評価と同僚講師からの評価には、ずれがあった。同僚の講師は指導の際に遠回しに指摘するが、自身はストレートに指摘するから、厳しいと言われるようであった。

この時期のスニは「教師は、生徒の歌唱力を上達させるために指導するべきだ」という教育観をもってため、ストレートに指摘し正しく歌えるように指導する自身の指導は「優しい指導」と評価していると考えられる。

語り 5：私の指導に対する生徒の評価（発話文番号 155, 156, 158）

しかし、むしろそのほうがいいと言ってくれる生徒たちも多いです。なぜなら先生、他の先生たちは“上手ね、上手ね”このように話すからです。でも、なぜ上手にできたかは話してくれない、もしこれは少し足りないとき、なぜ足りないかについては話してくれないそうです。ところで私は“この練習をする理由はこのようで、あなたがこの部分ができないからこのようにする”とこのようにはっきりと話してあげるからそのほうがいいそうです。

語り 5 のように、はっきり直すところを話してくれる自身の指導方針が良いと言ってくれる生徒がいることを、スニは筆者に語った。このことから、スニが自身の指導方針に自信をもってることが窺える。

4.1.3 この時期のストーリーラインと理論記述

上記に述べた結果を基に、この時期にスニがもっている教育観という観点から、ストーリーラインと理論記述を作成した。以下に示す。

ストーリーライン
スニは、韓国でクラシックを専攻し、韓国で講師の経歴があり、歌唱力もあるため、日本でも初面接で就職が決まったと思っている。韓国では入試レッスンと企画社の所属歌手にレッスンをしており、生徒が大変な芸能界で生き残るために厳しく指導していた。生徒の歌唱力が上達すると講師としてのやりがいを感じる。日本では『優しい』指導をしているつもりだが、他の講師たちに『厳しいって言われる』ようだ。良かった点、足りない点の理由を説明してくれない日本人講師たちの指導方針より、改善すべき点をストレートに指摘する私の指導方針のほうが良いと評価してくれる生徒たちがおり、自身の指導方針に対して自信もっていた。
理論記述
この時期のスニは、他の講師の指導に対して否定的に評価（「良かった点、足りない点の理由を説明してくれない」）しており、自身の指導方針（「生徒のために厳しく指導しなければならない」）に対して肯定的に評価していた。これは、韓国で形成された価値観（「歌唱力の上達のためには厳しく指導すべきだ」）に基づいて評価した結果である。

4.2 正社員として入社してから半年後（2013年10月、2回目のインタビュー）

スニは2013年4月に、アルバイトしていた音楽アカデミーに、正規の講師として入社した。2回目のインタビューは、入社してから半年経った時期に行った。この時期のスニは自身が教えている生徒が学校を辞めることでストレスを抱えていた。この時期の筆者とのインタビューの総発話文は487文であり、その中でスニの総発話文は242文である（筆者の総発話文は245文）。スニの全ての発話文に対してSCATを用いて分析した。その中から自身の仕事について語った発話文を抽出し、その一部の結果を以下に示す。

4.2.1 この時期のSCATによる4段階の分析手続き

発話文番号	テキスト	〈1〉 テキスト中の注目すべき文	〈2〉 テキスト中の語句の言い換え	〈3〉 テキスト外の内容	〈4〉 テーマ・構成概念
239 ～ 329	中略 (授業システム, 金銭的困難, 日本語のストレス, 全体ミーティング, 退校の事務手続きに関する語り)				
330	(4月の入社初期は) あ、ただ、そうなんだと思いました。だから『除籍』はお金がないから、あのようにお金を払わなくて切られたのは私のせいではないと思いました。	ただ、そうなんだと思いました。だから『除籍』はお金がないから、私のせいではない。	『除籍』はお金の問題。『除籍』は私の責任外の問題。	入社初期の考え。	『除籍』は私の責任ではないと思っ た入社初期。

332-1	お金がないから、だから私にちゃんと話して“何か問題があって辞める”とこのように話したり、“優先順位が変わった”“私と（スニ先生の授業が）合わない”、とかこのように話してくれたら、	お金がないから、私にちゃんと話して“何か問題があって辞める”。“優先順位が変わった”“私と（スニ先生の授業が）合わない”。このように話してくれたら、	生徒の私的问题。生徒の優先順位の変更。講師との相性。事前に相談してくれない生徒。	辞める理由の予測。	<u>生徒の私的问题。</u> <u>生徒の優先順位の変更。</u> <u>講師との相性。</u> <u>事前に相談してくれない生徒。</u>
332-2	‘私と（授業）するのが楽しくなくなったみたい’‘私とする、私にこれ以上学ぶことがなかったみたい’、とかこんな風に思ったり、反省したり、するのに。	‘私と（授業）するのが楽しくなくなったみたい’‘私にこれ以上学ぶことがなかったみたい’。反省したり、するのに。	楽しい授業ができなかったため、私に学ぶことがないため、反省。	楽しくない授業。自分の歌唱力の不足。改善点は、	<u>授業を辞める原因。</u> <u>把握できない改善点。</u>
333 ～ 355	中略 (退校手続きをしない生徒で困る事務側に関する語り)				
356	『退校』が、そのせいですごいストレスを受ける、本当に。	『退校』がストレス。			『退校』がストレス。
360	なぜなら1か月に個人レッスンは2回あります。2回ある子がいれば、3回ある子もいるし、4回ある子もいる。でもふつう2回ある子たちなの。1か月に2回をする、月に2回して歌が、え、上手になるはずがないのです。	ふつう2回ある子たちなの。月に2回して歌が、上手になるはずがない。	ふつう2回ある子たち。月に2回して上手になるはずのない歌。	歌唱力は練習時間と比例して上達。	<u>歌唱力が上達できない授業環境。</u> <u>足りないレッスン時間。</u>
362	韓国は基本的に週に2回レッスンですよ、少なくとも週に1回は(レッスンを)受けるようなシステムがある。プログラムが、ところが日本は個人レッスンが月に2回でグループレッスンが月に3回なの、合わせて月に5回で2万千円なので。	韓国は基本的に週に2回レッスンですよ、日本は個人レッスンが月に2回でグループレッスンが月に3回なの、合わせて月に5回。	韓国は週に2回レッスン。日本は合わせて月に5回。	韓国よりレッスン時間が少ない日本。	<u>韓国と日本の異なる授業システム。</u>
363 ～ 373	中略 (スニが働く音楽アカデミー出身の有名人・歌手・グループ、オーディションシステムに関する語り)				
374	それで月に2回、月に2回(と言っても)、一日中ではないでしょう、1か月が30日で、30日の中で2時間だけ私と会える、それである子と私がすぐに親しくなれるのでしょうか。	月に2回。30日の中で2時間だけ私に会える。それである子と私がすぐに親しくなれるのでしょうか。	月に2回。月に2時間だけ。親しくなれるのでしょうか。	親しくなるためには時間が必要。	<u>月に2時間レッスン。</u> <u>親しくなるには時間が不足。</u>

376	私が、それで、月に2回しか会えないの、2時間しか、だとすると他の28日間、あの子に何が起きたのか私は何もチェックできないじゃないですか、だから私はいきなり辞められたと感じるのよ。	月に2回しか会えないの。他の28日間、あの子に何が起きたのか私は何もチェックできない。だから私はいきなり辞められたと感じる。	私がチェックできない28日間、いきなり辞められたと感じる。	生徒の心境の変化がチェックできない28日間。	私がチェックできない時間、いきなり辞められたと感じる理由。
378	この子は以前からそんな考えをしたかもしれないし、私とレッスンをして、あの当時は楽しかったけど、なんか、一人でライブを見に行った(とする)、あるいは、私に言わずにオーディションを受けに行って、悪いことを言われた(とする)、それでなんか『へこんじゃって』なんか、(スニ先生は)‘自分と合わないかな’のように考えているうちに来ないかもしれないでしょう。	この子は以前からそんな考えをしたかもしれないし、それでなんか『へこんじゃって』なんか、‘自分と合わないかな’のように考えているうちに来ないかもしれないでしょう。	以前から考えた可能性、‘自分と合わない’という考え、来なくなる理由の一つ。	辞めることに繋がる可能性がある出来事。	急に辞める生徒、信頼関係形成の必要、私がチェックできない時間の生徒の経験。
380	それで私が毎日のように練習をして“SNSして”、“いつから何時まで練習した”(と報告するように)、私が宿題を出す。	私が毎日のように練習をして“SNSして”、“いつから何時まで練習した”(と報告するように)、私が宿題を出す。	毎日のように練習。練習時間のチェック。練習時間の増加。	歌唱力の上達のための工夫。	生徒の歌唱力の上達のための練習時間の増加、練習時間のチェック。
382	1日に、10分ずつストレッチ、20分発声、30分歌う、基本1時間練習プログラムをしてから、私に“何時から何時まで練習したか、それから練習しながら難しかった点、気になる点があればいつでもSNSを送れ”と、“報告しろ”と。	1日に基本1時間練習プログラム。私に“何時から何時まで練習したか、練習しながら難しかった点、気になる点があればいつでもSNSを送れ”と、“報告しろ”と。	生徒が自分で練習できるプログラムの提示。練習時間の報告を要求。	練習時間を増やすための努力。練習時間の報告を要求。	練習時間の増加は歌唱力の上達と比例、生徒に練習時間を報告することを要求。
384	それをやった、それをやったら“やる、やる”“良い、良い”と言いながらやるけど、やりながら、最初はみんな自ら歌手になりたい気持ちでくるから“頑張る”と言って、このように管理されることを嬉しがる、熱心に練習する。練習するうちにあの子たちはストレスを受けるのよ、‘先生に報告しなければならないの’”とか思って。	最初はみんな自ら歌手になりたい気持ちで“頑張る”と言って、管理されることを嬉しがって、熱心に練習する。練習するうちにストレスを受けるのよ、‘先生に報告しなければならないの’”。	熱心に練習する生徒。練習しながらストレスを受けるようになる生徒。	最初と変わってくる生徒の反応。報告することに負担を感じる生徒。	最初と変わってくる生徒の反応。報告することへの負担、歌唱力を上達させるための工夫。
385 ～ 397	中略 (SNSや交換日記の成果に関する語り)				

398	それが、見ていると面白いの、すごく面倒くさいけど、あ、そう、当日見て、適当にコメント書いたりするけど、でも見ながら、'あ、やっぱりこれはやってよかった'、こんなことを考える。	見ていると面白い。すごく面倒くさいけど。当日見て、適当にコメント書いたりする。'やっぱりこれはやってよかった'。	面白い。面倒くさい。SNS・交換日記の成果。		<u>面白い。面倒くさい。SNS・交換日記の成果。</u>
402	それ（SNS・交換日記）を見ながら、'この子はとても『前向き』なやつだな'、'見た目は『キャラ男だけど』いいやつだな'、'思ったより、（SNS・交換日記を）見ながら'親しくなったな'と感じるの。やはり人は『気が合う』『気が合わない人』がいる。	'この子はとても『前向き』なやつだな'、'見た目は『キャラ男だけど』いいやつだな'。（SNS・交換日記を）見ながら'親しくなったな'と感じるの。『気が合う』『気が合わない人』がいる。	SNS・交換日記で見える授業ではわからない生徒の様子。親密感の増加。		<u>SNS・交換日記で見える授業ではわからない生徒の様子。親密感の増加。</u>
406	本当に衝撃的です、私がとてもあの子を可愛がって私が私の愛をあげたと思ったのに、あの子は私の愛を受け入れたと思ったのに、違ったのか？考えると虚しくなりますよ。	本当に衝撃的です。あの子は私の愛を受け入れたと思ったのに。違ったのか？考えると虚しくなりますよ。	可愛がっていた子が辞めた時に受ける衝撃。虚しさ。	生徒が急に辞めた時に受けるショック。	<u>生徒が急に辞めた時に受ける精神的問題。</u>
407 ～ 473	中略 (SNS や交換日記を通じて仲良くなった生徒の生活に関する語り)				
474	なにかあったら、それを私に全部話す、私を100%信頼して私に全部話す子です。	私を100%信頼して私に全部話す子。	私を信頼するある生徒。		<u>私を信頼するある生徒。</u>
476	本当によかったでしょう、それ（SNS・交換日記）をしなかったら大変なことになったかも。	本当によかった。しなかったら大変なことになったかも。	SNS・交換日記の良さ。		<u>SNS・交換日記の良さの確信。</u>
478	そしてこの子がまた誰かの話を聞いて来て、とりあえず、歌を辞めて少し休んで歌手に、自分が選ばれないのはどう考えても外見の問題が一番大きいと思うから、やせると（他にも）何かする、とか、と言うの。	この子。歌を辞めて少し休んで、自分が選ばれないのはどう考えても外見の問題が一番大きいと思う。やせると。	歌を辞めて、ダイエットをするという生徒。		<u>歌を辞めて、ダイエットをするという生徒。</u>
479 ～ 515	中略 (生徒がダイエットプログラムに参加するまでの経緯に関する語り)				
516	だからとりあえず、センスはある、歌うのに、声もいいし、それを頑張って、それでアピールすればいけるのに、自己自尊心が低くて自信がないから、外見を気にするのよ。	センスはある。声もいい。それでアピールすればいける。自己自尊心が低くて自信がないから、外見を気にする。	歌の実力でアピールするべき生徒。低い自尊心が問題。	歌の実力を伸ばすべき。	<u>歌唱力を伸ばすべき生徒。低い自尊心の生徒。</u>

517 ～ 527	中略 (外見を重視する芸能界に関する語り)				
528	歌は、歌はあの自信感が問題なのに、あ、それで私がこの話をしてあの子が結局泣き出した。	歌は自信感が問題。私がこの話をしてあの子が結局泣き出した。	歌は自信感が問題。泣き出した生徒。		歌は自信感が重要。 泣き出した生徒。
529 ～ 725	中略 (泣いた子が受けてきた家庭教育、自分が受けてきた家庭教育、スニが歌唱力に自信がなかった頃の語り、音楽アカデミーで仲の良い同僚の講師に関する語り)				

4.2.2 具体的な語りに対する分析

この時期のスニは講師の能力の中で、生徒の歌唱力を上達させる能力が最も大事であると思っていた。そして辞める生徒が増えないように、スニは生徒の歌唱力を上達させるために努力した。以下ではこの時期のスニの仕事に関する価値観について語った部分を提示しながら述べる。

語り 6：担当生徒の退校に関する問題（発話文番号 330, 332-1, 332-2, 356）

(4月の入社初期は) … (中略) …お金を払わなくて切られたのは私のせいではないと思いました。お金がないから、だから私にちゃんと話して、“何か問題があって辞める”とこのように話したり、“優先順位が変わった”、“私と(スニ先生の授業が)合わない”、とかこのように話してくれたら、‘私と(授業)するのが楽しくなくなったみたい’、‘私とする、私にこれ以上学ぶことがなかったみたい’、とかこんな風に思ったり、反省したり、するの。… (中略) …『退校』が、そのせいですごいストレスを受ける、本当に。

語り 6で語られたように、入社初期にスニは、生徒の私的问题（金銭問題）、優先順位の変更、講師との相性が合わないことが、退校に繋がると推測していた。この時期には、スニに直接辞める理由を話してくれた生徒がいなかったため、具体的な改善策がわからなかったようだ。

語り 7：歌唱力の上昇にはレッスン時間が不足（発話文番号 360, 362 の一部）

… (中略) …月に2回して歌が、え、上手になるはずがないのです。韓国は基本的に週に2回レッスンですよ、少なくとも週に1回は(レッスンを)受けるようなシステムがある、プログラムが、ところが日本は個人レッスンが月に2回でグループレッスンが月に3回なの、合わせて月に5回… (中略) …

語り 7で述べられたように、音楽アカデミーのレッスン回数は歌唱力を上達させるのに足りないと思えていた。足りないと思う根拠になるのは韓国のレッスンシステムである。

語り 8：生徒との信頼関係づくりの困難（発話文番号 374, 376, 378 の一部）

… (中略) …1か月が30日で、30日の中で2時間だけ私と会えるのでしょ。私、それで、月に2回しか会えないの、2時間しか、だとすると他の28日間、あの子に何が起きたのか私は何もチェックできないじゃないですか、だから私はいきなり辞められたと感じるのよ。この子は前からそんな考えをしたかもしれないし、私とレッスンをして、あの当時は楽しかったけど、なんか、一人でライブを見に行っ(とする)、あるいは、私に言わずにオーディションを受けに行っ、悪いことを言われた(とする)、それでなんか『へこんじゃって』なんか、(スニ先生は)‘自分と合わないかな’のように考えているうちに来ないかもしれないでしょう。

語り 8 によるとスニは、急に辞めることを告げられることで、具体的になぜ辞めるのかわからなくて困っている様子が窺える。なお、スニはレッスン時間の不足で生徒との信頼関係形成ができないから、辞める前に相談を受けることができないと考えていた。

語り 9：退校率の減少のための努力（発話文番号 382）

1日に、10分ずつストレッチング、20分発声、30分歌う、基本1時間練習プログラムをしてから、私に“何時から何時まで練習したか、それから練習しながら難しかった点、気になる点があればいつでも SNS を送れ”と、“報告しろ”と。

語り 9 で語られたように、スニはレッスンがない日も生徒が歌の練習ができるように課題を出し、練習した時間を SNS で報告させるようにした。この時期のスニは、退校率を減少させるためにレッスン時間不足の解決という課題を設定し、それを解決するために努力していたことがわかる。

語り 10：生徒の気持ちが変わる（発話文番号 384 の一部）

それをやったら“やる、やる”“良い、良い”と言いながらやるけど、やりながら、最初はみんな自ら歌手になりたい気持ちでくるから“頑張る”と言って、このように管理されることを嬉しがって、熱心に練習する。練習するうちにあの子たちはストレスを受けるのよ、‘先生に報告しなければならないのに’とか思っ

語り 10 で語られたようにスニのこのような努力に対して生徒は、最初は歌手になりたい気持ちにあふれており、スニの指示に嬉しく従ってくれたが、徐々に SNS を通じた練習時間の報告が負担になり、ストレスを感じる生徒も出てきたようだ。このような経験により、スニは生徒の立場からは、先生に練習時間を報告することが負担になることに気がついた。

語り 11：SNS と交換日記の成果（発話文番号 398, 402）

それが、見ていると面白いの、すごく面倒くさいけど、あ、そう、当日見て、適当にコメント書いたりするけど、でも見ながら、‘あ、やっぱりこれはやってよかった’、こんなことを考える。…（中略）…それ（SNS・交換日記）を見ながら、‘この子はとても『前向き』なやつだな、’それを見て、‘見た目は『チャラ男だけど』いいやつだな、’と思ったり、（SNS・交換日記を）見ながら‘親しくなったな’と感じるの。やはり人は『気が』、『気が合う』『気が合わない人』がいるでしょう。

語り 11 で述べられたように、SNS と交換日記には生徒との親密感を高めるという成果もあり、スニはそれらのやり取りを、引き続き行っていた。

語り 12：ダイエットのために辞める生徒（発話文番号 406, 478, 516, 528 の一部）

本当に衝撃的ですよ、私がとてもあの子を可愛がって私が私の愛をあげたと思ったのに、あの子は私の愛を受け入れたと思ったのに、違ったのか？考えると虚しくなりますよ。…（中略）…そしてこの子がまた誰かの話を聞いて来て、とりあえず、歌を辞めて少し休んで歌手に、自分が選ばれないのはどう考えても外見の問題が一番大きいと思うから、やせると、…（中略）…だからとりあえず、センスはある、歌うのに、声もいいし、それを頑張って、それでアピールすればいけるのに、自己自尊心が低くて自信がないから、外見を気にするのよ。…（中略）…歌は、歌はあの自信感が問題なのに、あ、それで私がこの話をしてあの子が結局泣き出した。

語り 12 で語られたように、アイドルを目指してアカデミーに通っていた生徒に、突然ダイエットプログラムに参加するためにレッスンを辞めることを告げられる。生徒と仲良くなり、辞める前に相談を受けることができ、スニが設定した課題である親密感を高めることには成功していたと思われる。しかしそういう生徒が、やせるためにレッスンを辞めることを聞いてスニはショックを受け、生徒の本当の気持ちも聞かずに「自信がないから外見を気にする」のだと言ってしまう。生徒はその場で泣き出してしまい、このような想定外のことにスニは戸惑っただろう。

4.2.3 この時期のストーリーライン及び理論記述

上記に述べた結果を基に、この時期にスニがもっている教育観という観点から、ストーリーラインと理論記述を作成した。以下に示す。

ストーリーライン
この時期にスニが考えた退校の原因は、 <u>生徒の私的问题</u> 、 <u>生徒の優先順位の変更</u> 、 <u>講師との相性が合わないこと</u> である。しかし事前に相談してくれる生徒がいないため、 <u>改善点が把握できない</u> 。当時スニは、 <u>日本の授業システムは、月に2時間のレッスンであり、韓国と比べレッスン時間が不足する</u> と思っていた。 <u>生徒との信頼関係を形成するとともに、生徒の歌唱力を上達させるために、SNS・交換日記を通じて生徒に練習時間を報告してもらうこととした</u> 。SNS・交換日記のおかげで <u>授業ではわからない生徒の様子を知ることができ、親密感の増加</u> が感じられた。一方、 <u>生徒の反応をみて、報告することが生徒の負担になることにも気づいた</u> 。
理論記述
この時期の悩み（生徒の退校率）を解決するために、 <u>授業時間以外の時間を共有（SNS・交換日記を通じた報告）しようとする</u> 。その結果、 <u>悩みの一部を解決すること（「親密感の増加による退校前の相談受け」）</u> ができた。一方、それが逆効果（ <u>「報告への負担」、「歌唱力の上達のために努力するようにアドバイスしたら生徒が泣き出したこと」</u> ）となる場合もあることに気づく。既存の教育観に変化は見られないが、 <u>想定外の結果に戸惑う</u> 。

4.3 入社1年後（2014年4月、3回目のインタビュー）

3回目のインタビューは、入社1年後の時点で行った。この時期のスニは、相変わらず担当生徒の退校率が原因でストレスを抱えていた。スニの担当生徒の退校率が10%にまで上がっており、所属する音楽アカデミーで問題視され、スニに危機が迫っていた。この時期の筆者とのインタビューの総発話文は358文であり、スニの総発話文は196文である（筆者の総発話文は162文）。スニの全ての発話文に対してSCATを用いて分析した。その中で自身の仕事について語った発話文を抽出した。その結果を以下に示す。

4.3.1 この時期のSCATによる4段階の分析手続き

発話文番号	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき文	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉テキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念
726 ～ 834	中略 (日本での初ライブコンサートの経験, 日本での音楽活動, 退校率のストレスに関する語り)				

835	生徒たちが抜けて行って、抜けて行ったら、生徒を入れてくれないといけなのではないでしょうか。なのに(そう)してくれないの。	生徒を入れてくれない。	生徒を入れてくれない学校側。	退校率が高い時期の困難。	<u>退校率が高い時期の困難。</u>
836	それで私があの時、とても当時そしてビザの問題もあったでしょう。ビザ(の問題)もあったから、そのビザのせいでかなりストレスをたくさん受けた時、生徒たちもたくさん抜けて行きました。ビザの問題もあったでしょう。ビザの審査に2回落ちて、1年間そればかりやったでしょう。姉さん。そのせいでずっと待っていたでしょう、私。	ビザのせいでかなりストレスをたくさん受けた時、生徒たちもたくさん抜けて行きました。	ビザのストレス、同じ時期に高くなった退校率。1年間に2回落ちたビザ申請。	ビザのストレス。日本滞在ができない不安。	<u>ビザのストレス。</u> <u>日本滞在ができない不安。</u>
837	非常に苦しいでしょう。それが私とても大変でした。ビザのせいで。ビザのせいで私はどうすればいいかわからなかったし、とてもとても苦しくて、とても心細くて、それに生徒たちはまた抜けて行くし、私は本当に社長に私捨てられると思った。本当に。	非常に苦しい。とても大変でした。ビザのせいで、とても心細くて。社長に私捨てられると思った。	ビザ申請期間に経験した苦しみ。社長に捨てられる不安。	今の仕事を続けられないことへの不安。	<u>今の仕事を続けられないことへの不安。</u>
838 ～ 850	中略 (音楽アカデミーの規模、授業システムに関する語り)				
851	(主任の先生が)“たぶん(退校率を)少しずつ『減らしていけば大丈夫』とおっしゃった。また“悩みがあったり、生徒のせいで問題があったりすれば話してくれ”と。あんなになんでこんなに退学率が高いの?と言いながら苦しみたりすることはないけど、毎日毎日(主任の先生と)ミーティングをするけど、いつも辞める子たち、辞める子たちの話をするのです。それでちょっとストレスを受ける部分もあるけれど。	“(退校率を)少しずつ『減らしていけば大丈夫』”と。毎日毎日ミーティングをする。いつも辞める子たちの話をする。ストレスを受ける部分。	主任の先生のアドバイス。やさしい主任の先生。いつも辞める子たちの話。ミーティングもストレスの一部。	主任の先生と毎日ミーティング。ミーティングのストレス。	<u>退校率を下げるためのミーティング。</u> <u>退学する子についての話し合い。</u> <u>ミーティングのストレス。</u>
853	最初は私のようにいきなり、一気に、(生徒に)抜けられた先生がいました。それが最近、あの先生の生徒たちが1人も抜けない。それで私が聞いたの。…(中略)…“自分自身を振り返って、自分自身に問題があるのを生徒たちは先生に何か問題があるのを敏感に全て感じ取る”って。こんなことで(生徒は)自分自身をちゃんと見てくれないということに対する失望感や『もやもや』するから、そのようなことが全部(退校率に)繋がるそうです。それで私がどのようにしたかと聞いたら、とりあえずたくさん話を聞いてあげたようだ。(同僚の講師は)自分が話そうとしないで聞いてあげたということでした。	最初は私のように。(生徒に)抜けられた先生。最近、あの先生の生徒たちが1人も抜けない。それで私が聞いたの。“自分自身を振り返って、自分自身に問題があるのを生徒たちは先生に何か問題があるのを敏感に全て感じ取る”。	私と同じような困難を経験した先生にアドバイスを依頼。話を聞いてあげること。先生の問題を敏感に感じ取る生徒たち。	先輩に助言求め。問題解決のための工夫。先行者のアドバイスを参考に、生徒との繋がり。	<u>問題解決に参考になる先輩の講師の助言。</u> <u>先生の不安を感じ取る生徒。</u>

854	<p>そこで悟りました。私はクラシックを専攻して、クラシックの先生たちはとても大声で叱ります… (中略) …私は先生に“スニ、あなたは脳がないの?”とまで言われたんですよ。楽譜を投げられ、“出てけ!”と、練習していかなかった日は。それで家に帰ったり、でも、クラシック業界ではそういう先生が悪い先生ではないのです。本当に私にちゃんと(指導)してくれる、私を本当に愛してくれる先生なんですよ。そして私も(先生の気持ちを)わかる… (中略) …先生が私を大事にしているから私を叱るんだ、頑張らなきゃと思う。それが日本の子たちは少し違う。そのように情熱をもって叱ったりすることを負担に思う子たちもいる。</p>	<p>悟りました。私はクラシックを専攻して、クラシックの先生たちはとても大声で叱ります。クラシック業界ではそういう先生が悪い先生ではない。日本の子たちは違う。情熱をもって叱ったりすることを負担に思う子たちもいる。</p>	<p>私が専攻したジャンルの先生たち。クラシック業界のいい先生と悪い先生。韓国と日本の生徒の違い。</p>	<p>目の前の生徒を理解するための努力。</p>	<p><u>厳しい指導に対する私と異なる受け入れ方。</u> <u>自分の生徒は、自分が生徒として受けていた指導と不適合。</u></p>
855	<p>そのようにそんなふう(生徒の)話を聞いてあげたことがないの、そのように話してくれる、(講師の話を)ありがたく思う生徒たちもいるけど、ありがたく思う子たちもいます。“先生のようにこんなに私をずっと見てくれる、私に勧めてくれる、私に指摘してくれる、そして私の気持ちを理解してくれる人はいなかった”と、そういうふう(生徒の)話をしてくれる子たちもいます。一方、それを負担に思ったり、小言だと思ったりする子たちもいる。</p>	<p>(生徒の)話を聞いてあげたことがない。(講師の話を)ありがたく思う生徒たちもいる。それを負担に思ったり、小言だと思ったりする子たちもいる。</p>	<p>話を聞いてあげたことがない私。(講師の話を)ありがたく思う生徒。小言だと思ったりする生徒。負担に思ったりする生徒。</p>	<p>生徒の気持ちの理解。</p>	<p><u>講師の話をありがたく思ったり聞く生徒。</u> <u>講師の指摘に否定的に反応する生徒。</u></p>
856	<p>そしてあの先生が言ったことが、“スニも誰かにずっと何か言われると、うんざりするし、うるさいと思わないか、それからここにいる子たちは歌いたくて来ているから、歌うのをあの、指摘されることより、自分の歌を聞いてほしい”と。</p>	<p>“指摘されることより、自分の歌を聞いてほしい”。</p>	<p>歌の指摘より、聞いてほしい気持ち。歌う人たちの心理。</p>	<p>歌を聞いてほしい気持ちの理解。</p>	<p><u>歌を聞いてほしい生徒の気持ち。</u></p>
857	<p>それが、その話を聞いて、‘あ、そのとおりだ’と思ったのです。そして何だっけ、歌いたい人たちの心理が、自分の歌を誰かに聞いてほしいこと、その次に注目されたいこと、心理、その次にメンタルがそんなに安定的ではない子たち。</p>	<p>‘そのとおりだ’。自分の歌を誰かが聞いてほしいこと。注目されたいこと。メンタルが安定的ではない子たち。</p>	<p>歌う人の気持ち。</p>		<p><u>今まで聞いてあげたことがない私。</u></p>
858 ～ 859	<p>中略 (趣味で歌を習う生徒に関する語り)</p>				

870	ところで最近、この子の表情が、以前はすごく面白いと（私に）メールしたり、“先生、これは何でこうなんですか？”と聞いたりしたのに、メールも無くなって、この子顔色が暗くなったの。それで、私がこの子に“ところであなた最近なんかあるの？”聞いたら、“いいえ”と。（それで私が）“どうしたの、言ってみな、何が問題なの？あなたなんか悩みあるでしょう？なんか気に入らないことがあるでしょう？”と聞いたら、しばらく静かにしてから（生徒が言った）歌うのが楽しくなくなっただって。以前は歌うのがとても楽しかったのに今は、（ここで）歌を習ってからは‘このように歌ってはいけない、今の歌は正しくない’と。	最近、メールも無くなって、この子顔色が暗くなったの。“あなた最近なんかあるの？”。“何が問題なの？なんか気に入らないことがあるでしょう？”と聞いた。歌うのが楽しくなくなっただって。歌を習ってからは‘このように歌ってはいけない、今の歌は正しくない’と。	最近様子が変わった生徒への声かけ。歌が楽しくなくなったという悩み。	能動的態度。	<u>最近様子が変わった生徒への声かけ。歌が楽しくなくなったという生徒の悩み。</u>
871	自由がなくなったの。その話を聞いた時、私が、私が（生徒が）歌を通じて楽しむ自由を、私が奪ったの。これを私が急に気づいたの。	自由がなくなった。私が（生徒が）歌を通じて楽しむ自由を奪ったの。急に気づいたの。	生徒が歌を通じて楽しむ自由。生徒の自由を奪った私。	自分の指導の否定などの気づき。	<u>歌を通じて楽しむ自由を奪った私の指導。自分の指導の悪いところの気づき。</u>
873	考えてみると、歌はそんなもんじゃないのに、歌は歌に正解はないのに、なんか変な歌い方する子たちもアーティストと言って出て歌うでしょう。歌は表現の自由なのに、私がこの子からそれを奪ったの。	歌に正解はない。変な歌い方。アーティスト。歌は表現の自由。私がこの子からそれを奪ったの。	正解がない歌。変な歌い方の子たちもアーティスト。歌は表現の自由。	表現の自由としての歌。	<u>表現の自由としての歌。</u>
874	私は本当に良い先生なのか、ということ急を急いで考えて、あの時、あの子に刺激を受けてそうだ、楽しいのが一番なのに音楽これはそんなものなのに、私がなぜずっと正解を求めるようにあの子に“これはこのようにすればいいし、あれはあのようによければいいのよ”と話したのか。	私は本当に良い先生なのか。あの子に刺激を受けて楽しいのが一番。私がなぜずっと正解を求めるように。	私は本当に良い先生なのかという疑問。刺激を受けた私。楽しいのが一番。歌い方で正解を要求した私。	生徒の歌い方で正解を要求した私。	<u>良い先生に関する疑問。生徒の歌い方で正解を要求した私。反省。音楽は楽しいもの。</u>
876	それから、私があのようにレッスンを受けてきたの。なぜなら、クラシックはあれがあるの。クラシックは正解があるの。クラシックはなぜなら、時代があるでしょう。作曲家ごとの時代があるでしょう。その時代の背景の、背景を理解してその作曲家を理解してその作曲家がこの曲をなぜ作ったのか、歴史的背景とかがあるから、それを勉強してその次に、勉強したとおりに歌うの。楽譜どおり歌って。歌いながらその中に私のキャラクターを入れ込むの。“私はこのようにこの曲を解釈した、それでこの部分に感情を込めて歌いたい”というところで音楽性がわかるの。クラシックはそのような正解があります。クラシックはある程度の、“無条件にこのように歌わなければならない”とは言わないけど、“このように歌うのが正しいよ”というのがありますよ。	私があのようにレッスンを受けてきた。クラシックは正解がある。勉強してその次に、勉強したとおりに歌う。楽譜どおり。歌いながらその中に私のキャラクターを入れ込むの。“このように歌うのが正しいよ”。	私を受けてきたレッスン。楽譜どおりの歌。歌い方に正解があるクラシック。	自分が生徒として受けてきた指導を自分の生徒に適用しようとする自分への気づき。	<u>正解があるクラシック。クラシックは楽譜どおり。自分が受けてきた指導のように教えようとする自分。</u>

877	でも POP はほとんどそうではないから、だから私はそのようなものを、あの子はしかも入試でもないし趣味でやっているのにあの子がそのように感じたのは私が悪かったのよ。それで私が(あの子に)謝ったの。	POP はそうではない。あの子は入試でもないし趣味でやっている。私が悪かった。私が(あの子に)謝った。	クラシックと違う POP. 趣味として習う歌. 生徒が受けた感じ. 私の間違っただ指導に関する謝罪.		<u>クラシックと歌い方が違う POP.</u> <u>趣味で習う歌.</u> <u>私の間違っただ指導.</u> <u>反省と謝罪.</u>
879	もちろん音程、拍子、これらは基本的には合わなければならぬけれど、ここ (POP) ではこの、このように歌いたいなら、このように歌ってもいいの、正解はない、私はそう思っている人だから。	音程、拍子、基本的には合わなければならぬ。(POP) では正解はない。	音程、拍子は基本. 表現に正解がない歌に対する認め.		<u>音程、拍子は基本.</u> <u>表現に正解がない歌に対する認め.</u>
880 ～ 887	(中略) (歌うのが楽しくなくなった生徒と仲直りし、退校手続きしてから退校したことについての語り)				
888	辞める子たち、辞める子たちがいて、私がとてもたくさん考えた、‘私の問題はなんだらう’と、‘私の問題はなんだらう’。	辞める子たちがいてたくさん考えた。‘私の問題はなんだらう’。	自分の指導法の振り返りは辞める子たちのおかげ。	退校と授業の関連付け。	<u>自分の授業の問題を振り返るきっかけ.</u> <u>辞める生徒.</u>
890	あまりにも『きついレッスン』をしていると思う、“ここではこうしなければならない”、“もう一度、もう一度このように”と。それから、私がしゃべりすぎだと思う。あ、聞いてあげないとダメなのに、聞いてあげないで、(私が)しゃべったの。あの子たちは聞いてほしくて来ているのに、自分たちが聞いて帰るの。だから(生徒たちは)『もやもや』するだろう。	あまりにも『きついレッスン』をしていると思う。私がしゃべりすぎ。聞いてあげないとダメなのに。だから(生徒たちは)『もやもや』。	きついレッスンが問題。聞いてあげないのが問題。	見えてきた自分の授業の問題点。	<u>水面上がった問題.</u> <u>きついレッスンが問題.</u> <u>聞いてあげないのが問題.</u>
891 ～ 913	中略 (退校率に関するストレスの軽減、ビザ問題解決のための社長との相談に関する語り)				
914	ところで今月も(退校生が)1人しかいそうにないです。	今月も(退校生が)1人しかいそうにない。	退校する生徒の減少。		<u>退校生の減少.</u>
916	最近思うのは、とりあえず、私が生徒たちに言うのが、“あなたがしてほしいこと(指導)を言ってみて。そうすれば、私がそれに合わせてあげる”…(中略)…そうしたら、(生徒が)わかったって。	“あなたがしてほしい(指導)を言ってみて。そうすれば、私がそれに合わせてあげる”。	生徒がしてほしい指導。生徒に合わせる指導。		<u>生徒がしてほしい指導.</u> <u>生徒に合わせる指導.</u>
917 ～ 1083	中略 (仲の良い同僚の講師、友人、恋人に関する語り)				

4.3.2 具体的な語りに対する分析

この時期は、高い退校率が問題視されたことやビザが下りないことで、ストレスを受けていた

時期である。このようなことを解決するために、他の講師にアドバイスをもらった。以下ではこの時期のスニの仕事に関する価値観について語った部分を提示しながら述べる。

語り 13：高い退校率及びビザ問題（発話文番号 835, 836, 837 の一部）

生徒たちが抜けて行って…（中略）…当時そしてビザの問題もあったでしょう…（中略）…そのビザのせいでかなりストレスをたくさん受けた時、生徒たちもたくさん抜けて行きました。…（中略）…ビザの審査に2回落ちて、1年間そればかりやったでしょう…（中略）…そのせいでずっと待っていたでしょう…（中略）…それが私とても大変でした。ビザのせいで。…（中略）…私は本当に社長に私捨てられると思った。本当に。

語り 13 によると、退校率が上昇した時期のスニは「就労ビザ」の審査⁸に2回落ちていた。「就労ビザ」が下りないとスニは日本で働き続けることができないため、当時相当なストレスを受けていたようだ。このようにビザが下りない状況の中で、これからも日本にいられるかという不安を抱えていたこと、さらに同じ時期に退校率が高くなり、これからもこのアカデミーで仕事が続けられるかという不安を抱えていたことが推測できる。

語り 14：退校率を下げるためのミーティング（発話文番号 851 の一部）

…（中略）…毎日毎日（主任の先生と）ミーティングをするけど、いつも辞める子たち、辞める子たちの話をするのです。それでちょっとストレスを受ける部分もあるけれど。

語り 14 によると、退校率という問題を解決するために、主任の講師と一定の期間、毎日個別に辞める生徒について話し合い、少しずつ退校率を下げていくために努力していたことがわかる。退校率を下げるためとはいえ、毎日のミーティングはスニにとってストレスだったことがわかる。

語り 15：高い退校率の問題解決のために同じような事情にあった同僚の助言を求める（発話文番号 853 の一部）

最初は私のようにいきなり、一気に、（生徒に）抜けられた先生がいました。それが最近、あの先生の生徒たちが1人も抜けない。それで私が聞いたの…（中略）…どのようにしたかと聞いたら、とりあえずたくさん話を聞いてあげたようだ。（同僚の講師は）自分が話そうとしないで聞いてあげたということでした。

語り 14 でも主任講師と個別ミーティングをし、話し合っていたが、それは音楽アカデミーの方針により行われていたことである。ここでは語り 15 で語られているように、自身と同じような経験をした講師にスニが自ら相談をもちかけ、退校率の減少のためのアドバイスを求めてその講師と話し合っている。なおその話し合いから、今までスニがもっていなかった、生徒の話を聞いてあげるとい指導方針を知ることができた。

⁸ 外国人が日本で働くためには、「就労ビザ」が必要とされる。「就労ビザ」以外の在留資格で滞在している外国人が、日本で働きたい場合は、資格外活動許可書が必要とされる（外務省による、入管法第 19 条）。スニがアルバイトをしていた時期は、「留学ビザ」に「資格外活動許可書」をもって働くことができたが、学校を辞めたため、「留学ビザ」から「就労ビザ」に在留資格を変更する必要がある。

語り 16: 歌うのが楽しくなくなった生徒 (発話文番号 870, 871, 873, 877, 879 の一部)

歌うのが楽しくなくなったって。以前は歌うのがとても楽しかったのに今は、(ここで) 歌を習ってから… (中略) …自由がなくなったの、その話を聞いた時、私が、私が (生徒の) 歌を通じて楽しむ自由を、私が奪ったの。… (中略) …歌は表現の自由なのに、私がこの子からそれを奪ったの。… (中略) …あの子はしかも入試でもないし趣味でやっているのにあの子がそのように感じたのは私が悪かったのよ。それで私が (あの子に) 謝ったの。… (中略) …もちろん音程、拍子、これらは基本的には合わなければならないけれど、ここ (POP) ではこの、このように歌いたいなら、このように歌ってもいいの、正解はない、私はそう思っている人だから。

語り 16 に見られるようにスニはある日、生徒から「歌を習ってから歌うのが楽しくない」という相談を受けた。生徒のこのような正直な発言を聞き、スニは講師としてショックを受けたと思われる。語り 16 から自身の指導方針が原因で、趣味で習っている生徒の歌を通じた自由な表現や喜びを奪ってしまったと反省していることがわかる。

語り 17: ‘私は良い先生?’ (良い先生に関する疑問) (発話文番号 874 の一部)

私は本当に良い先生なのか、ということを急に考えて、あの時、あの子に刺激を受けてそうだ、楽しいのが一番なのに音楽これはそんなものなのに、私になぜずっと正解を求めるようにあの子に“これはこのようにすればいいし、あれはあのようにすればいいのよ”と話したのか。

語り 17 によると、語り 16 の生徒に刺激を受けたスニは、私は本当に良い先生なのか、なぜ生徒に歌い方の正解を求めるような指導をするようになったのかを、自分自身に問いかけた。

語り 18: 自分が受けてきた指導のように教えようとする自分 (発話文番号 876 の一部)

それから、私があのようにレッスンを受けてきたの。なぜなら、クラシックはあれがあるの。クラシックは正解があるの。… (中略) …クラシックはある程度の、“無条件にこのように歌わなければならない”とは言わないけど、“このように歌うのが正しいよ”というのがありますよ。

語り 18 で語られているように、スニは「正解があるレッスン」を長年受けてきた。語り 16 及び語り 17 と合わせて考えると、それまでのスニの指導方針が、スニが生徒として受けてきたレッスンに強く影響されていることがわかる。そして語り 18 から、スニがその影響に気づいたことが読み取れる。

語り 19: 自分の生徒は、自分が生徒として受けていた指導と不適合 (発話文番号 854, 855 の一部)

そこで悟りました。私はクラシックを専攻して、クラシックの先生たちはとても大声で叱ります… (中略) …でも、クラシック業界ではそういう先生が悪い先生ではないのです。本当に私にちゃんと (指導) してくれる、私を本当に愛してくれる先生なんです。そして私も (先生の気持ちを) わかる… (中略) …先生が私を大事にしているから私を叱るんだ、頑張らなきゃと思う。それが日本の子たちは少し違う。そのように情熱をもって叱ったりすることを負担に思う子たちもいる。… (中略) …ありがたく思う生徒たちもいるけど、… (中略) …それを負担に思ったり、小言だと思っ子たちもいる。

語り 19 からわかるように、スニは生徒として受けてきた厳しいレッスンを肯定的に思っており、厳しく指導「してくれた」先生の気持ちを、理解しているとのことである。しかしそのよう

な指導に対する自身の生徒の否定的な反応を見て、生徒によってその指導が合わない場合もあることに気づいた可能性がある。

語り 20：私の『きついレッスン』が問題（発話文番号 888, 890 の一部）

辞める子たちがいて、私がとてもたくさん考えた、‘私の問題はなんだろう’…（中略）…あまりにも『きついレッスン』をしていると思う、“ここではこうしなければならない”、“もう一度もう一度、このように”と。…（中略）…

語り 20 で述べられているように、自身の指導を「あまりにも『きついレッスン』」と評価している。このことから、今まで自身が生徒に教えようとした「歌い方」は、「スニが良いと思う歌い方」であり、それは、生徒が歌いたい歌の歌い方ではないことに気づいて反省したと思われる。

語り 21：生徒に合わせるようになった私の指導（発話文番号 914, 916 の一部）

ところで今月も（退校生が）1人しかいそうにないです。最近思うのは、とりあえず、私が生徒たちに言うのが、“あなたがしてほしいこと（指導）を言ってみて。そうすれば、私がそれに合わせてあげる”…（中略）…

語り 21 で語られたように、スニは指導についての生徒の希望を聞くようになっていた。このように生徒に指導希望を聞くことは、スニの中で決まっていた歌い方を生徒に押し付けるのではなく、生徒が望む歌い方に合わせた指導をしようとする態度の表れだと考えられる。

4.3.3 この時期のストーリーライン及び理論記述

ストーリーライン
この時期のスニは、 <u>ビザ問題や高い退校率で困っていた</u> 。それらの問題から、今後日本に滞在できない、 <u>今の仕事を続けられないという不安があり</u> 、 <u>ストレスを受けていた</u> 。退校率を下げるためのミーティングを毎日し、 <u>ミーティングによるストレスも受けていた</u> 。ミーティングでは、 <u>退校する生徒についての話し合いをした</u> 。高い退校率という問題解決のために困難を経験したことがある先輩の講師に、 <u>自ら助言を求めて参考にした</u> 。先輩の講師に、 <u>生徒は先生の不安を感じ取る、自身の歌を聞いてほしがるということを聞き、生徒の気持ちを理解する必要性を感じる</u> 。スニは、 <u>今まで生徒の話を受けてあげたことがない自身に問題があること、生徒から歌を通じて楽しむ自由を奪った自身の指導に問題があることに気づいた</u> 。スニ自身が専攻したクラシック音楽では、 <u>ある程度正解がある楽譜どおりの歌い方があり</u> 、自身は <u>そのような指導を受けてきた</u> 。教える立場になった今、 <u>自身が受けてきた指導のように教えようとする自らの方針に気づき、反省したスニは、生徒に合わせる指導をしようとするようになった</u> 。
理論記述
入社半年後の問題（「退校率」）が解決できず、入社1年後も続いている。音楽アカデミーで問題視され、 <u>強制的に上司の助言を聞くことになりストレスを受ける</u> 。しかしその後、 <u>同僚の講師に自らアドバイスを求めて話し合うことで、辞める生徒の気持ちへの理解が深まる</u> 。また、 <u>自身と異なる価値観をもっている生徒との話し合いにより、講師である自身に問題がないか振り返って、今までの自身の指導方針に対する自己評価が、肯定的なもの（「優しい指導」）から否定的なもの（「あまりにもきついレッスン」）に変わっていた</u> 。既存の価値観が、 <u>働きながら経験した困難（「退校率」）、その困難を解決する中で出会った人々（上司及び同僚の講師、辞める生徒）に影響された</u> 。

4.4 第4節のまとめ

4節では、三つの時期におけるスニの仕事に関する価値観について分析した。以下にまとめる。

まず、4.1 アルバイトとして働いていた時期のスニは、自身が優しく指導していると思っていた。当時スニは、「生徒の歌唱力を上達させるために指導するべきだ」という教育観をもっていたため、ストレートに指摘し正しく歌えるように指導する自身の指導は「優しい」指導であると評価したことが考えられる。しかしそのような彼女の指導は、他の講師に厳しいと言われていた。

次に、4.2 正社員となって半年が経った時期のスニは、SNS・交換日記を通じて練習時間を報告してもらい、生徒の歌唱力を上達させるために努力していた。しかしやせるためにレッスンを辞めようとする生徒（語り12）に、「自信がないから外見を気にするのだ」と言い、その場で生徒を泣かせてしまう。このことから、生徒の本当の気持ちを理解しようとしないうスニの態度が見られる。

最後に4.3 入社1年後の時期のスニは、自身の指導に対して、アルバイトをしていた時期とはまったく逆に「あまりにも厳しい」と評価するようになっていた。この時期のスニは退校率減少のために、主任講師や同僚の講師、そして歌が楽しくないことで悩んでいた生徒（語り16）と、話し合う機会をもっている。そしてその話し合いにより、それまでの指導が「私が思うような歌い方で歌わせるべきだ」という教育観に基づいた指導であったことに気づき、「生徒がどういう態度で音楽と接し、どういう歌い方をしたいと思っているのか」を考えるようになった。

こうした気づきと反省により、「生徒が望む歌い方に合わせて指導するべきだ」という教育観がスニの中で生成された結果、それまでの自身の指導に対して「あまりにも厳しい」という自己評価をするようになったものと考えられる。

5. 考察

ここでは、スニがヴォーカルトレーナーとして日本で働きながら、どのようにその価値観が変わり、職場に適応してきたのかについて考察する。

韓国で教育を受け韓国で歌を教える中で形成されたスニの価値観は、日本で歌を教えるアルバイトをしていた時期と正社員として入社した初期には変化せず、入社後1年経った時期に初めて変化した。彼女の語りから、自身とは異なる指導方針をもっている講師や自身と異なる環境で教育を受けてきた生徒との話し合いを通して、その価値観が変わったことがわかった。しかし専門学校に通いながらアルバイトをしていた時期と入社初期にも、同僚の講師及び生徒との話し合いは存在していた。なぜ、入社1年後にスニの教育観は変わったのか。それを探るためにもう一度、各時期の出来事とスニの心理状態を加えて考えてみよう。

アルバイトをしていた時期には自身の歌唱力に自信があり、自身のように歌唱力が上達するよう、生徒に厳しく指導していた。その後、アルバイトから正社員となり、音楽アカデミーで生徒の退校率を管理しなければならない立場となる。しかしスニに退校理由を言ってから辞める生徒がいなかったため、どのように管理すればいいのかもわからなかった。そのような状況を改善するために、スニは生徒にSNSや交換日記で報告を求めることとする（語り9）。しかし入社1年

後の時期には、そのようなスニの改善策は逆効果を招き、音楽アカデミーで問題視されるほど退校率が上がっていた。同じ時期にスニはビザ申請で2回落ちてしまい、これから日本にいられるかわからない状況にかなりのストレスを受け（語り 13）、相当な不安を抱えていたことが推測できる。悪化する退校率の問題で働き続けられるかどうかかわからない状況に加えて、2回のビザ申請に落ち今後日本にいられるかどうかかわからない状況が重なり、二重の不安に苦しんでいたことがわかる。そのような状況でスニは、それまでのように自身で考えて改善策を出すのではなく、他の講師に相談をもちかけるようになった。その講師に「生徒の話聞く」というアドバイスを受け、初めて生徒と真摯に向き合い、本音の話をお聞きしようとしたという点で、スニは問題解決に向けて能動的な態度を身につけたと言える。そしてその講師に「生徒の話聞く」というアドバイスをもらい（語り 15）、自身の指導の際に参考にした。そして普段と様子が違う生徒に対して「どうしたの？（語り 16）」と声をかけるようになった。そこで生徒の「歌を習ってから歌うのが楽しくなくなった」という本音をお聞きし、スニはショックを受けたと考えられる。それをきっかけに自身の指導について振り返り、「私は良い先生？（語り 17）」という質問を自身に投げかけるようになった。そしてスニが教えようとした歌い方は、スニが習ってきたクラシックの歌い方であり、生徒が歌いたい歌の歌い方ではないことに気づいた。その気づきから、趣味で歌っている生徒にとっては自身の授業が「きついレッスン（語り 20）」だったことが見えてきた。このことからスニが多様な指導方針を認めるようになったことがわかる。そして生徒が望む歌い方に合わせて指導しようとする態度（語り 21）から、スニの教育観が多様化していることが窺える。そのような変化は、二重の不安を抱えていた時期に同僚や生徒と話し、自身の指導方針の問題点に気づいたこと、さらにそこから生じた深い内省によってもたらされたと考えられる。

ただし、本稿のスニの場合はビザ問題と高い退校率という危機的状況の中で能動的な態度が生まれたが、危機的状況ではない状況でも能動的な態度が生まれるのかについては、明らかにできなかった。今後の課題としたい。

参考文献

- 福岡昌子・趙康英 (2013) 「グローバル人材育成と企業の留学生雇用に関する研究」『三重大学国際交流センター紀要』 8: 19-38.
- 八田直美・小澤伊久美・嶽肩志江・坪根由香里 (2012) 「ノンネイティブ新人日本語教師にとっての研修の意義—PAC 分析によるタイ人新人日本語教師のビリーフ調査から—」『国際交流基金日本語教育紀要』 8: 23-39.
- 経済産業省産業人材参事官室 (2007) 『グローバル人材マネジメント研究会報告書』.
- 李奎台 (2016, 掲載予定) 「ある成人韓国人の価値観に影響を与えた日本での経験—評価のあり方の変遷に注目して—」宇佐美洋 (編) 『「評価」を持って街に出よう』東京: くろしお出版.
- 日本語教育学会 (編) (2005) 『新版日本語教育事典』東京: 大修館書店.
- 小川一夫 (監修) (2004) 『社会心理学用語辞典 改訂版』京都: 北大路書房.
- 大谷尚 (2008) 「質的研究とは何か—教育テクノロジー研究のいっそうの拡張をめざして」『教育システム情報学会誌』 25 (3): 340-354.
- 大谷尚 (2011) 「SCAT: Steps for coding and theorization: 明示の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『感性工学』 10(3): 155-160. 日本感性工学学会.
- 新館啓・松崎学 (2009) 「教師の PAC 分析による新任期の振り返りの研究」『山形大学教職・教育実践研究』 4: 17-30.

新館啓・松崎学 (2010) 「教師の PAC 分析による自己成長の振り返りの研究」『山形大学教職・教育実践研究』
5: 35-46.

A Qualitative Analysis of the Diversification of Teaching Values of a Korean Vocal Trainer Working in Japan

LEE Kyutae

Doctoral Student, Tokyo University of Foreign Studies /
Adjunct Researcher, Center for JSL Research and Information, NINJAL [-2015.03]

Abstract

This paper considers how the teaching values of a Korean vocal trainer working in Japan have changed over time. The longitudinal observation and interviews were conducted over a period of 1 year and 3 months after she began working in Japan. The data were qualitatively analyzed based on SCAT (Steps for Coding and Theorization). Upon starting work, she was confronted with a high dropout rate among her students. Despite her attempts to reduce this, the dropout rate rose. In this critical situation, she consulted with other trainers and with her students. Through such consultation, she came to realize others' values, which led her to reflect upon her own teaching practices. Subsequently, her teaching values appeared to diversify. It is through this process of diversification that she became aware of the ways in which her former teaching had been inappropriate. Thus, the main factor leading to diversification of her teaching values appears to have been the self-reflection following interactions with others, which had been prompted by the critical situation itself. This paper reveals the process of the diversification of values caused by a critical situation and its consequent problem-solving.

Key words: career formation, foreign workers, teaching values, SCAT, self-reflection